

特別支援教育に携わってきて思うこと

会津若松市立行仁小学校 教諭 入澤 みどり

特別支援教育に携わって25年。この四半世紀で様々な変化があり、私自身もその都度その変化に対応してきた。その中で1番の良い変化は、通常の学級での特別支援を要する児童への理解とその支援が進んだことだと思う。私は今でも特別支援学級を受け持っているが、特別支援学級在籍の児童だけではなく、校内の支援を要する通常の学級の児童へ支援やコーディネートをしている。そのニーズは減ることは、今後もないだろう。また、子どもたちの学びの多様性をしっかり認め、保障するのが私たち教育現場の使命であり、特別支援教育に関わる自分の使命だと思っている。

その使命感を支えるために学んできた支援の引き出しの中身もどんどん変わってきた。25年前、通常の学級の担任から初めて情緒障害学級を受け持ち、必死に学んだ自閉症の支援の仕方。その後どんどん増えてきたADHD児への対応の仕方。さらにLD児。近年は愛着の課題がある児童への対応の仕方など。障がい名は同じでも出会う児童一人一人の困り感は異なり、まだまだ学ばなければいけないことがたくさんある。特別支援教育は、教育界の中でも、特に終わりのない学びが必要な現場だと思う。

しかし、この学びは、一人ではなかなか続かない。今まで、共に学ぶ多くの仲間を支えられてきた。その「仲間」、「ネットワーク」が、特別支援教育に携わって得た自分にとっての宝である。教員同士だけでなく、地域のさまざまな立場の人との出会い、つながりを持つことで、障がいのある方たちを支える地域社会が熟成されてくると思う。

私は、今年還暦を迎える。これからどう障がいのある方たちとつながっていくのか、その先をぼんやりと考え始めている。まだはっきりと答えはでていないが、今後も学び続け、仲間や地域とのつながりを大切に進んでいきたいと思う。

特別支援教育への思い

石川町立石川小学校 教諭 相楽 里美

ねむのき学園のコンサートの合唱を手伝った学生時代の時のことである。コンサート前の練習会で、ある出来事が起こった。私より体の大きな男子生徒が急に声をかけてきた。「〇〇〇行きたい」と言うが、私には何を言っているのか分からなかった。「ん？」と何度も聞くと、彼は聞いてもらえないことに、段々声が大きくなった。その声は、いつも身近にいる支援者の方が気付くこととなった。「トイレね。行こうか。」とあっさり彼をトイレへと誘ったのだ。私は、自分の不甲斐なさを感じると同時に、気付くことや理解することの大切さを痛感したのだ。特別支援教育におぼろげながら興味を持った瞬間である。

その後、教員生活の3分の1を特別支援教育に携わらせていただいた。今年度で定年となるが、なんと幸せな時間だったか。反面、指導のノウハウが分からず、大変な思いをして涙したこともあった。それでも約30人の児童を担当させてもらうことができた。人間教育の原点として子供たちから学ぶことが多々あった。それと同時に、「もっとこうしてあげたい」という思いを持った。

最近、通常の学級には、学習支援を必要とする子供が多くなったと感じる。また、定数8人の特別支援学級でも、自閉症で知的障がいのある子やADHDの子、LDの子等、同じクラスで、指導の大変さを感じた。日々担任は、支援して欲しい子らに「一人一人のニーズに応えているだろうか。理解しているだろうか」と考えている。しかし、一人一人に向き合う時間が足りない。準備の時間も足りない。どうすれば時間を生み出せるか、工夫してきたつもりだ。しかし現状では難しい.....

今後、充実した特別支援教育の為に、特別支援学級在籍者定数の削減や支援員が増加されることを願う。さらに、特別支援学級入級児の増加に伴い、環境が整えば、もっと子供たちの声に耳を傾けることができるのではないかと期待したい。